



触手姦...

モンスターに丸呑み...

拘束レイプ...

研究員達に輪姦...

後輩戦姫の研究記録

~研究員とモンスターに犯される日々~

戦姫絶唱シンフォギアG、GX CG集



地下の研究所に、拘束された調がいた。

調「よし、実験ははじめましょうね。調ちゃん。」

調「なにを…するつもり…うう」

調「新しい薬を試すために、調ちゃんに協力して貰おうかな〜と。く〜く〜」



調：「あああっ……いやあ……っ」

研究員：「おおっ、まだなにもしてないのよ、おまんこでっぴでっぴだわ。」
調：「いっ……身体がおかしい……」

研究員が調の感度を確かめるように調の秘部を弄り、
愛液がどんどん溢れてくる。

研究員：「ほらほら、調ちゃんの大事なとこ、丸見えだよ？」
調：「はあ……み、見ないで……っ……いやあ……」



調：「はあ。。。はあ。。。」

感じた「と」のない感覚が調を襲い、あつという間に体力が消耗した。

研究員：「どうした？調べちゃん。もう疲れたのか？」

調：「もうやめて。。。」「んなの。。。」

研究員：「そうにはいかないよ調ちゃん。」「れからが本番だからね。」「

調：「な。。。なにを。。。っ」



調：「んんんっ……！」
研究員のペニスが調の秘部に侵入し、奥まで突き刺さる。

調：「んぐっ……いっ、いやあああああ」

研究員：「ふむふむ、薬の効果は抜群だね。
こんなにキツキツのマ○が余裕で入れられる。」

研究員は腰を振り始め、そのペニスが調の膣内を激しく摩擦する。
調「はっ、んんっ……いやあ……んんんんっ……！」

調：「カが……どんどん抜けて……ああ、んんっ、んんんっ……！」
研究員：「これはなかなかいい実験体だ、気持ちいい……っ……！」

抽送がどんどん早くなり、
調の口から弱々しい呻き声が漏らしたず。



調：「ひゃあぁぁ……あぁっ…なにが……お腹の中に出てる……」

研究員：「うっ……気持ち良すぎて……
つい射精しちゃった……うっ……」

調：「はぁ……き、気持ち悪い……離して……うっ……うっ……」

調：「どんどん……入ってくる……はぁ、はぁ……いやっ……」

調：「つうらう……いやあ……」

研究員：「はあ……調ちゃんの中、キツくて暖かくて気持ちよかったよ。」

研究員：「調ちゃんも気持ちよかったですよっ？」

調：「そんな……」と……っ」

研究員：「んん……」

研究員：「薬まだ効いているようだから、あと何回いけるかな……」

調：「も……も……ういやあ……」



そのあと、薬が切れたらまた追加投与され。

調は何人も研究員と性行為を続けた。

調は拘束されたまま、抵抗もできず。

ただ次々と研究員達の肉棒を受け入れるだけだった。

調：「うっ…切ちゃん…たすけて…」

研究員：「調ちゃんと切歌ちゃんは本当仲良しだね。」

「心配いらないよ、切歌ちゃんは別の実験で手伝わせているから。」

調：「そんな…切ちゃん…うっ…」

研究員：「それより、もう一回中に出すよ。調ちゃん！」

調：「うっ…もう、いやあ…」

ドクターウェル：「はあ……はあ……」

寝ている調の服を剥がして、

ドクターウェルはそのまま調の上に乗った。

調：「ずう……」

ドクターウェル：「そのまま寝ていらんだ、
そして日々苦勞している僕を慰めてくれ。」



ドクターウェル:「うひゃ〜」これは気持ちいい〜」
調:「んっ…んっ…んっ…」

ドクターウェル:「それでも起きないか？
リンカー実験の疲れのせいかな？」

調:「んっ…んっ…んっ…んっ…」

ドクターウェルの肉棒が調のお尻にこすり続けたが、
調は起きる気配がない。



調：「な、なに？…ど、ドクター？…」

ドクターウェル：「あっちゃー、起きちゃったよ。」

調：「や、やめてっ…ドクター。い、痛い…」

ドクターウェル：「我慢しろ…」

「っちはいろいろ手伝ってあげたんだから。」

調：「そんな」言われても…ひゃっ…いやあ…」

調：「めめめめっっ……」

ドクターウェル：「うひゃ……出るっ……でるっっ……」

調：「「……」の変態……っ……んっ……」

調：「いや……入らないで……っ……はあ……あああ……」

調：「んっ……気持ち悪い……ドクターのが入って……っ……ああ……」



ドクターウェル：「はあ……はあ……」

ドクターウェル：「いっぱい出した……もうストストじゃないか……」

調：「うん……ん……ん……」

ドクターウェル：「いっぱい溜まってるだから、僕はまだ満足してないんだけど。」

調：「ぐすん……ん……ん……」



調：「き……切ちゃん……」

アルカ・ノイズに破られ、調はその触手達に拘束された。

調（もうだめ……や、殺される……！
切ちゃん……「めんない、私……」

アルカ・ノイズは調達を殺すつもりはなく、別の意図があった。



調：「ひゃあ……んっ……な、なにを……」

二本の触手が調の秘部を広げ、

もう一本の触手がゆっくりと調の膣の中へ入っていく。

調：「い、いやあ……」

必死に足を閉じようとしたが、手足は触手に縛られ、自由に動くことができなかった。



調：「あああ、ああああああっ……！
痛い！いたい……！」

周りのアルカ・ノイズの触手が次々と調の体内に侵入していく。

調：「あっ……あああ……！」

身体を守る生理反応で、調の膣から愛液が溢れだす。

調：「はあ……ああっ、ひゅっ……！」



触手の激しい攻めを受け、調は失神寸前だった。

調：「はあ……はあ……」

調：「一体、なにを……助かったの……？」

調は現状を理解出来ていない、
これからなにされるかを……

調：「もう、離して……切ちゃんを助けないと……」



明らかに形の違う、もう一本の触手が調の膣に侵入し、
一気に子宮まで到達する。

調：「ああああっ………またっ……うっ……」

その一本の触手が機械の如く抽送し、
調の秘部から愛液がポタポタと地面に零れ落ちた。

調：「やめて……いやあ……」

調：「これ以上……動かないで……身体が、おかしく、なる……」

調：「んんっ、ああっ、はあああっ……やあ……ひゃあああ……」

調：「あめっ……あめめっ……」

射精を終え、触手は調の膣内で微弱に脈動する。

調：「私の中に……ノイズの……」

調：「んっ……離れて……もう、解放して……」



別のアルカ・ノイズの触手が交代で調を犯して、
そしてまた次の、次の……

調：「あああつ……もういやあ……
切ちゃん……」

身体が固定されたまま、何度も何度も……

アルカ・ノイズは調を犯し続けた。

調：「はああ……ああああ……もう、入らない……
入らないよ……」




研究員A:「ほり、動くな！大人しくしろ！」

調:「いやあ、離して！なにをするの！」

研究員B:「なんでもいいだろう、お前達は大人しく言うことを聞けばいいんだ！」

調:「くっ、んんん……」





研究員達は自分の肉棒を調の身体に押し付け、強引にセックスをしようとした。

調：「んっ……んっ……」

研究員A：「なんだ、その態度は。まったく手間がかかる奴だ。」

研究員B：「ほら、啜えるんだ。気持よくしてくれりゃ、すぐに帰してやる。」

調：「だ、誰がこんなものを……っ……んっ……っ……」

調：「ひゃああああ……うむっ……んんっ……!?」


腔に肉棒を入れられ、痛みで回を開けてしまった瞬間、

もうひとりの研究員の肉棒が腔内に侵入した。

研究員B：「いい子だ、このままじゃだれ。」

調：「んんっ……んちゅっ、ちゅるるっ……んんっ……」





研究員B:「まったく、下手だな……」うちが動いてあげるよ。」

調:「んんっ……んんちゅっ……やあ……
むっ、んぐっ……」

研究員A:「これは、なかなか……キツイぞ……!」
「でも、これはこれで気持ちいいな……!」

調:「んんっ……!……んんんんっ……!」

膣と喉奥が摩擦され、調は必死に肉棒を吐き出そうとした。
しかし、それに抗って、研究員は更に奥まで肉棒を押し込む。

調:「んんっ……んぐっ……」

調：「んんんんっ……んぐっ……んんっ……」


調の腔内も膣内も、一瞬で精液に充満された。

研究員A：「うっっ……」

研究員B：「ほら、しっかり飲み込むんだ……うっっ……」

調：「んぐっ、んんっ……あぐっ、んっ」





調：「んぐ…んぐ…んぐ…んぐ…んぐ…んぐ…」

研究員B：「はあ…そうそう…いっぱい飲め…」

調：「んぐ…」

研究員A：「気持ちよかったな…
射精たばかりなのに、また固くなっちゃった。」

研究員B：「よし、」のまま第二ラウンドいくか…」

調：「んぐ…んぐ…んぐ…んぐ…」

研究員B:「ほら、もっとう行くぞ。」

調:「やあ、んぐっ……むっ……」

研究員A:「「っちも気持ちよくしてくれな、ほらほら……」

調:「んぐっ、んぐっ……あっ、んぐっ……」



調：「な……なにをしたの……身体が……熱い……」

調：「な……なにをしたの……身体が……熱い……」

調：「な……なにをしたの……身体が……熱い……」

調：「な……なにをしたの……身体が……熱い……」

調：「な……なにをしたの……身体が……熱い……」



調：「はあ、ああああっ……ああっ……！」

研究員A：「す、すっい……入れた瞬間にいつちやってる……！」

研究員B：「はははっ、すっいでしよう。いっぱい楽しんでくれ。」

研究員A：「じゃ、遠慮無く！それえ……！」

調：「はあ、はあああ……ああああっ
……身体が……変……！」

調：「……やだあ……やだあ……！」

研究員C：「やだ？思い切り楽しんでるよっ！見えるけどな。」

調：「そんな……」と……ない……っ……あああ……！」



研究員C:「ほら、顔に掛けるぞ…しっかり匂うんだ。」

調:「いやあああああ……」

研究員B:「精液の臭いに反応して、もっと肉棒が欲しくなるでしょうっ!」

調:「はあああっ……!んんんっ……!」

研究員A:「おおっ……自分から腰を振ってやがる……
そんなに肉棒が欲しいのか。」

調:「ちがつっ……身体が勝手に……あああっ……」



研究員A:「そろそろ中に出すよ、準備はいいかっ」

調:「いやあ……やめて……んんっ……」

研究員B:「口はそう言ってるけど、身体は素直でいい子でしたね。」

調:「んんっ……んんっ……んんっ……」



調：「う……動けない……」

ノイズの粘液が調を宙吊りにして、まるで蜘蛛の巣に囚われた様に、身体が奪われた。

調：「やあ……ふ、服が……っ……」

ノイズの攻撃でシンフォギアが破壊され、

調の秘部と可愛い乳房が晒された。

調：「いや……降ろして……」



ノイズの触手は調の膣に侵入し、どんどん奥に進んでいく。

調：「ひびく……」

調：「いやあ、いやあ……」

触手は調の穴より何倍もデカく、

中へ進む度に調の身体に激痛が走る。

調：「んんっ……入って……ないで……!!」



口の中に入っていた触手が急に膨らみ始めた。

その膨らんだ部分がゆっくりと調の方へ近づいていく……

調：「やあ……なに？……んんっ……うえ、んんっ……」

必死に触手を吐き出そうと、噛み千切れようと……
触手は喉の奥まで入っていく。

調：「んんんっ……んぐっ……」



ドクターウエル：「さあ、遠慮無く食べ尽くせ！ネフィリムよ！」

ネフィリムが調を持ち上げ、そのシンフォギアを嚙り…呑み込む。

調：「いやあ…」

ドクターウエル：「あらあら、どうやら食べるだけじゃ足りないみたいだね。」

気付けば、ネフィリムのぬるっとした生殖器が調の秘部に押し付けていた。

調：「こんな…あんっ…っ…！」



調：「入って…くる…っ…!!」
ひゃあああああああ!!」

抵抗しようとすると、
ネフィリムが更に調の身体を握りつぶすように力を掛ける・

調：「へっ…!!」

調：「中で…動…っ…!!」



ネフィリムの動きが段々激しくなり、
巨大な性器を調の膣内の肉壁を擦り付く。

調：「ああっ……ああっ……激しい……っ」

調の秘部からぐちゅぐちゅといやらしい水音が漏らしている。

調：「お……大きい……苦しい……あんっ、
あああっ……離してっ……んんっ……！」



調：「んんんっ……うっっ……うんんっ……！」

ドクターウエル：「おおっ、射精てるね……
ネフリムと奏者の性交、なかなか興味深いな。」

調：「うっっ……もうお腹が……だめえ……！」

調：「気持ち悪い……こんな……
化け物に……侵されて……うっっ……！」



調：「ひゃあ……なにか……お尻の中に……
いやあ……んっ……んっ……」

ネフィリムの股間から何本の細い触手が調の尻穴に侵入する。

調：「ひい……だめ……入らないで……」

調：「……切ちゃん……切ちゃん……助けて……っ……」



ドクンドクンと、細い触手から精液を調の体内へ送る。

調：「うえ……ええっ……んんっ……ああっ……！」

異物が体内に入っていく、調に激しい吐き気が走る。
それでもネフィリムは絶えなく精液を送り続ける。

調：「はあ……ゆるして……」「めんなさい……ああっ……」

調：「もういや……ああっ……んんっ……はあ、ああああっ……！」



調：「……………」は「……………」切ちゃん……………」いない……………」

目を覚ました調がいるところは、ネフィリムの体内だった。

調：「私……………ネフィリムに……………食べられちゃったの……………」

調：「そんな……………うそっ……………うっ……………動けない……………」

ネフィリムの胃部から無数の触手が調の身体を拘束し、固定していた。



調：「うっっ……なんか……変な臭いがする……」

身体を包む肉壁から、強烈な臭いがする液体が分泌された。

調：「頭が真っ白……あぁ……私……っ」

調：「はぁ……うっっ……息が……できな……っ」



調：「あああつ……ああつ……あん、いやあ……」

一本の巨大な触手が調の秘部の入り口に押し付け、そのまま膣内まで侵入する。

調：「ああっ……んっ……誰か……助けて……マリア……切ちゃん……」

調：「っっっ……はあ……いやあ……」



調:「あああつ……いやあ……いやあああああ……」

巨大な触手が止まることなく射精続ける。

調:「うっ……けほっ……ああ……いやあ……」

ああっ、んんっ……」



長い時間が経ち、触手の射精がやっと終えた。

調：「んっっ…んっっ…」

調は苦しそうに声を漏らした。

射精が終わっても、調を解放することはなかった…

調：「んっっ…ああっ…やあ…いやあ…」

調の秘部に繋がる触手がまたゆっくりと動く。



調：「うっっっ……また……出てるっっ……」

そのあとも、定期的に調の体内に精液が流れこむ。

調：「んんっ……もっっいちゃあ……もっっ」「がっっ出っっ……ひゃんんっ……」

調：「うっ、あんんっ……んんっ……壊れちゃっ……
お腹が破けちゃっ……んんっ……」



アルカ・ノイズに敗れた切歌と調。

二人共アルカ・ノイズの触手に拘束された。

切歌「な、なにするんデスカ！ 離して！ 調——っ！」

必死で調に呼び掛けるが、その声は届かなかった。

切歌「調……誰が、誰が調を……」



切歌：「なんデスカ……」「れ……うっつ、変なと「触らないで……」

調の「とを心配する」と「るではなかった。

切歌を囲むアルカ・ノイズ達の触手が、
切歌の秘部と尻を犯そうとする。

切歌：「ひっ……あああ……、ああっ……」



切歌：「あぁっ……いやデス……そんなと」ろ……」

切歌：「うっ……どんどん入ってくるデス……」

切歌：「はぁ……はぁ……前も、後ろも……ノイズに……うっ……」



触手の責めを受けて、切歌は軽く絶頂を迎えた。

切歌：「あぁっ……身体が熱いデス……おかしいデス……」

切歌の秘部の愛液と触手の体液と混じり、
ポタポタと床に零れ落ちた。

切歌：「うっっ……気持ちいいデス……」



次の瞬間、別のアルカ・ノイズからデカイ生殖器らしきものが
切歌の秘部を侵入した。

切歌「ああああっ……くっ、んんん……」

切歌「なに……か、大きいのが入ってくるデス……んんっ……」



切歌：「あんっ、ううっ…んっ、うんっ、んぐっ…」

触手はリズムミカルに抽送し、その根っこん部分が少しづつ膨らみ始めた。

切歌：「んっ、死んちゃっデス…んんっ…ううっ…」

切歌：「なにか、来るデス…いやデス…んんっ…」





切歌：「止まって……もう無理デス……うううああああ……」

切歌：「あぁっ……」

アルカ・ノイズの性器が脈度し、
大量の精液が切歌の子宮を充満した。

切歌：「あああああぁっ……！……あうっ、ううっ……！……ああああっ……」

切歌：「もう……いやデス……んんっ……んんぐっ……！」

ドクンドクン：アルカノイズの射精は途切れず、
ずっと切歌の子宮に精液を吐き出し続ける。

切歌：「うっっ……んんっ……くっ、んんっ……！」

切歌：「まだ……出てるデス……もう、いやデス……んんっ……！」



研究員A:「よし、切歌ちゃん。じつじつだったからね。」

切歌:「なにするんデスか……?」

研究員A:「いつもと同じ、簡単な身体検査だから、緊張しなくてもいいですよ。」

切歌:「検査……デスから……」



プシュー。一人の研究員が切歌の首に紫の薬を打った。

切歌「んっ！」

研究員B「「うちもお注射しようね。」

もう一人の研究員が意識朦朧の切歌の秘部に肉棒を入れさせる。

研究員B「「すぐ終わるから、我慢しててくださいね。」

切歌「「うっっっっんっ、あぁっっっ」



研究員C:「薬が効いてきたね、もう眠ってるよ。」

切歌:「んんっ……」

研究員B:「寝たとしても、ママO:「ほちゃん」と反応するね……
もうびしょびしょじゃないか……」

研究員C:「意識はないが、身体はエッチな気分になるんだね。
ほら、自分からち○こを舐めてるよ。」

切歌:「ねるっ、んんっ……はあ、んっ……」



切歌：「んぐっ……ぐっ……」

研究員C：「おっ……精液を飲んでるよ」の子……
切歌ちゃんは本当にエッチなんだね。」

研究員A：「はははあ、僕達がそうさせたんじゃないか……」

切歌：「んっ……んっ……」



切歌:「あぁっ、ああああっ……」

研究員B:「うっっっ、もっっだ……」

切歌:「うっっ、あぁっ……ああぁっ……」

研究員C:「そんなに吐いたらやばいじゃないすかね……」

研究員A:「どうせ起きたら今の「と全部はれるから、さっさと」。

切歌:「はぁ……ああぁっ……」

研究員B:「じゃ、もう「発行」っかな……」

切歌:「あっ、ああぁっ、んんっ……」



切歌「なんデスか…これっ!」

切歌の服は破けられ、手足はノイズの粘液に拘束された。

切歌「離せっ!…んなのいやデス…!」のっ…のっ…!」



異様な形がした触手が切歌の全身を擦る。

切歌：「きゃあ！そ、そこはダメデス！」

切歌の秘部に興味を持ち、触手はその入り口に擦り付けた。

切歌：「ああっ……ちょっと、待ってデス……ダメデス……！」



切歌「ああああっ……！」

無情の触手は切歌の膣内に侵入し、
ゆっくりと子宮へと進む。

切歌「入ってくるデス……ううっ……！！
ああああああっ……！」



切歌「はむっ、んんっ？！
んんっ、うっ、へっ、うえええ、んんっ……！」

必死に抵抗したが、それでも切歌は触手の侵入を許した。

前穴と口の中が侵され、触手が激しく抽送する。

切歌「んむっ、んんんっ……ぶっ、あっ、
ああんっ……！……やめっ……んぐっ……！」



切歌「んんっ!? ああっ……
いやあっ……んんっ……」

切歌の腔内に侵入していた触手の表面が急に膨らみ、
なにかの液体を切歌の口の中に出そうとする。

切歌「いやあ、うえっ……んんっ……あああっ、んんんんっ……」



切歌『んんんっ……んぐっ、んっ、んぐ、んぐう……!』

びゅるるるー!。切歌の腔内は触手の精液に充満された。

切歌:『やあ、'じゅ'くっ……んっ、んぐっ……!』

切歌は吐き出そうとするが、精液の勢いに負けてしまった。

切歌:『んんんっ……'じゅ'くっ……'じゅ'くっ……!』



切歌：「んんっ……んんぐっ……」

切歌（今度はなんデスカ……っ）

休憩する暇もなく、切歌はもう一本の触手の異変に気付いた。

切歌（まさか……そんな……無理デス……っ……!!）

切歌：「んんっ……んんぐっ……いやあ……デス……」



切歌「うっっ……んっっ……うぐっ、んぐっ……んっ……」

切歌の子宮に大量の精液が流れ込んだ、さっきより比べられないほどに……

精液が子宮を圧迫し、切歌は苦しそうに痙攣する。

切歌「んっっ……ダメデス……んぐっ……んっ……」



切歌「んっ……んぐっ……」

切歌(お腹が……苦しいっ……)

胃の中も、子宮の中も精液に満たされ……
切歌の腹部はまるで妊娠しているように膨らんで見えた。

切歌「んっ……んぐっ……」



切歌：「ドクター……っ！なにするんデスカ……！」

ドクターウエル：「お前らみたいな役立たずは、ネフィリムの餌食にするしかないじゃないか。」

切歌：「う、うそ……そんな……！」

ドクターウエル：「こんな歴史的な瞬間の一部になれるのだ、むしろ感謝しろよ！」

切歌：「なに馬鹿なことと言っんデスカ……はやくやめさせて……くっ……！」



ネフィルムは切歌のシンフォギアを食い干切れながら、
自分の性器を切歌の秘部に押し付ける。

切歌：「ひい！…なんデスか！…やめてっ…！…っ…！…！」

ドクターウェル：「どうやら君の身体に興味を持ったようだ、
もっと喜んだらどうかな。」

切歌：「ふざけないで…！…デス…！…っ、ああっ…！…いやあ…！…！」



ネフィリムの性器が一気に切歌の膣内に侵入し、
興奮したネフィリムは激しく腰を振る。

切歌：「痛いデス……んんっ……やめっ、んっ、くっ…………！」

切歌：「んぐっ……いやデス……抜いてっ……んんっ……！」



射精が終え、切歌は力が抜けて深く深呼吸をした。

切歌：「あぁっ……はぁ……はぁぁぁ……」

切歌：「もうやめて……これ以上は……無理デス……」

ネフィリム：「ウウウウオオオオオ……ッ……」

切歌：「あぁぁっ……っ……」



切歌：「んんぐっ……うんんぐっ……
お、お尻に……んんっ……！」

ネフィリムの性器から何本もの細い触手が切歌の尻穴に侵入する。

切歌：「くっ……んんっ……！」

ネフィリムは再び腰を振り、切歌の身体は勝手に揺らされた。

切歌：「んんっ、いやあ……っ……デスっ！んんっ……！」



切歌：「ああああっ……！！！！！！
ああああああああああああああああっ……！！！！！！」

ドクンドクンと、切歌の腸内、膣内に大量な精液が流れ込んだ。

切歌：「ううう……ああっ……あああっ……し、し、ぶ……へ……へ……」

ドクターウェル：「調のことなら心配いらないよ、このあと
ネフィリムが美味しくいただくからね」

切歌：「そ、そんな……あああっ……んんっ……
はあ、はあああ、あああっ……」



切歌：「……は……っ」

切歌：「ネフィリムのなかデスカ……っっっ……」

切歌はネフィリムの丸呑みされ、狭い胃袋の中にいた。

切歌：「ひい……なんデスカ……触手っ？……」

胃壁から無数の触手が切歌の身体を縛り付けていた。



切歌：「んんっ……！」

胃壁、触手から液体が分泌され、切歌の全身に掛けた。

切歌：「気持ち悪いデス……んんっ……！」

液体が掛かった切歌の肌は異常に熱くなり、痒く感じた。

切歌：「んんっ……んんっ……！」



切歌：「あああっ……なにか入ってくるデス……っ」

一本の太い触手がゆっくりと切歌の秘部に潜り、弱く抽送しはじめた。

切歌：「はああ……あああっ……ネフィリムの中で……
侵されっ……くっ……」

切歌：「ああっ……さあ……」



切歌:「ああああっ……いやデス……ああああっ……」

太い触手から精液が吹き出し、

どくんどくと切歌の子宮を充滿する。

切歌:「ああっ、いやあ……くっ、んんんぐっ……」



切歌：「もうだめ……デス……」

触手の射精が終わり、切歌の膣から精液が流れだす。

切歌：「うっ……はぁ……」

切歌：「頭が真っ白になって、身体に力が……入らないデス……」



切歌：「また……入って……ううっ……!!」

射精したばかりの触手がまた精液を吐き出す。

切歌：「ううっ……んんぐっ……」

切歌：「もう、入らない……デス……」



一定時間を経過したら、触手はまた射精し、永遠と切歌の身体を犯し続ける。

切歌：「うっっ……んんっ……もうダメデス……」

切歌：「んんぐっ……んんぐっ……調……じぶん……」

切歌：「神様……せめて、調だけは、助けてあげて欲しいデス……」

切歌：「おね……が……」

